
雄介君の素朴な疑問

虹雪まい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雄介君の素朴な疑問

【コード】

N6980T

【作者名】

虹雪まい

【あらすじ】

俺の夕空はいつだって、憂鬱をはらんで輝いていた。

憂鬱な空、歩みを進める度、冷たい風が頬を叩く。

・・・あと何度、この空を見たらいいんだろう。

どうして、いつから俺の空は、こんなに冷たく、寂しいものになってしまったんだろう。

冬の空なんていったら、雲が立ちこめる度にわくわくしたものだ
った。

雪が降ればいい、雪が積もればいい、雪合戦をしたい、雪だるま
を作りたい。

・・・そんなことを思わなくなったのは、いつだったか、全くも
って思い出せない。

でも、出来るならその時に戻りたい、と思う。あの頃に戻れたら、
どれだけ幸せだろうか。

なにも考えず、楽しい事だけを思って、願って、それを叶えるた
めにはどんな努力も惜しまなかった。

遠足の時には、てるてるぼうずを作った。七夕には、短冊に汚い
字で願い事を書いた。運動会が近くなると、近所の子たちと集まっ
て、公園でトレーニングまがいのことをしていた。クリスマスには、
サンタさんに、って、クッキーを作った。

・・・頑張る事が苦痛になった過去の時点に戻れるのなら、それ
を苦痛に変えないよう、思考錯誤するだろうに。

・・・まあ、こんなことをどれだけ思っても、叶うはずがないん
だけど。

ただ、今はこの曇り空だけが暗く、俺の心に影を・・・

「ゆんゆんみーつけっ!!」

ドッ

「うっ！」

感傷に浸っていた俺の背中に、鞆に加えて、かかった重み。その勢いもあいまって、それは呼吸に障害をきたす。

「えへへーっ。」

えへへ、じゃ、ねえよ、早く、降りろ。・・・じゃないと、俺、死ぬから。

「あれー、ゆんゆん、反応悪いーい。」

がっかりしたご様子の幼馴染にようやく解放され、俺は身をかがめて呼吸を整える。新鮮な、しかし乾いた冬の空気が肺の中を満たし、喉は痛い、ああ、生きてる、と思った。

「反応悪いって・・・お前の重みで息できなかったんだよ！殺す気か！」

「えー、だって私そんなに重くないもん。」

「そういう問題じゃねえ！」

しばし言い合って、ふう、と息をつく。

・・・この底抜けに明るく、わがまま放題な女性は我が幼馴染、名取亜紀妃様である。

亜紀妃様はどうも俺・・・もう既に露呈しているから言う必要もないであろう、根暗の代名詞のようなこの俺に、なぜかご執心らしい。

亜紀妃ほどのスペックがあれば、言い寄る男など、掃いて捨てるほどいるだろうに。なんで俺なのか、さっぱり理解ができない。

・・・嬉しいのは、嬉しいんだけどさ。・・・俺も、亜紀妃、好きだし。

でも、それと同時に、どうしても気後れしてしまって、何度も告白をお断りしている。

「ゆんゆんはホント、どうしてそんなにお堅いのかなあ・・・。もし私がゆんゆんなら、こんな可愛い女の子に迫られたら、ガバツと行っちゃうよ？すかさず・・・ガバツとー！」

「可愛い女の子?どこどこ?」

「……ゆんゆんのばかああああ!」

「ほかすか、痛くないけど……なんだか、痛い。」

「思ってもいないような返答しかできない自分が、歯がゆくもあり、正しいような気もして。」

「本当に、俺って心底面倒くさい生き物だな。」

「ああ、もう、わかった、可愛い、亜紀妃様は、世界で一番、可愛いです。はい。」

「……なんか、心がない。」

「亜紀妃……可愛いよ。」

「言い方は改善されたけど!!目が笑ってる!!」

「でも、亜紀妃と一緒にいるときは、色んな嫌な事、全部忘れられる。だから、つつい、依存してしまうんだ。」

「ずっと、一緒にいたい、そう、思ってしまう。」

「もし、俺がもっとプラス思考の人間で、もっと明るい性格だったとしたら……迷わず、すぐに亜紀妃を抱きしめるのに。ああ、ほんと、昔に戻って人生やり直して来たい。」

「……まあ、もっとも?亜紀妃が言うように、ガバツ、といく勇氣は、恐らく俺が俺である以上、過去が変わったところで、無いとは思っけども?」

「……ともかく、こんな暗い人間に亜紀妃様は勿体ないわけです。」

「……亜紀妃には、きつと、もっといい人がいる。」

「……ゆんゆん?」

「ん?」

「……ゆんゆん、なんか、悩んでる?」

「……お前についてだよ。」

「んーまあ、な。悩み多きお年頃なのよ、普通、この年齢。普通はな?」

「ちょっと皮肉っぽく言ってみる。ホント、亜紀妃みたいに能天気な生きられたら、どれほど幸せなんだろうな。すべての物事を、プ

ラスに変換できるその能力を俺にも少し分けて・・・

「・・・私が、何も悩んでないみたいな言い方。」

・・・え。

むすつ、と下を向いてしまった亜紀妃。こんな表情は、初めてみたかもしれない。

・・・ドキツとした。もしかして俺、今、凄い失言した・・・？

「・・・私だって、辛い事、沢山あるもん。」

「・・・辛い事・・・？」

「・・・だって・・・ゆんゆん、ちつとも私に振りむいてくれな
いんだよ？」

ズキン、胸が痛む。涙目で見つめられれば、俺は全くもって身動きが取れなくなってしまうた。

こういうとき、スマートな対応が出来ればいいんだけど、駄目だ、テンパっちゃって、なにも考えられない。

「あ・・・亜紀妃・・・ごめ・・・」

「・・・なーんちゃってー！」

顔を上げ、いたずらっぽく笑う亜紀妃。拍子抜けして、すっかりアホ面を晒す俺の頬を人差し指でつつき、亜紀妃は唇を尖らす。

「そうだねー、私は全然悩んでないや。ゆんゆんのこと好きだけど、振り向いてくれなくなっちゃって平気！私が勝手に好きなだけ、っ
て思ってるから、全然、苦じゃないよつ。むしろ、追い回すの、楽
しいー！」

言つて、亜紀妃は俺の少し先を歩きだす。俺は暫く目を瞬かせて
彼女の後姿を眺めた後、我に返つてその後を追った。

・・・どちらが、亜紀妃の本音だったのだろう。

推測するに、前者なんじゃないだろうか。と、というか俺の考えが

浅はかだった。亜紀妃だって、色々悩んでいるに決まっている。同じ人間なのだから。

・・・となれば、いつも明るく振る舞える亜紀妃は、俺よりプラスに考えられる、何かを持ってているのだろうか。

俺が行き詰まっている問題を、既に解決してしまっているのだろうか。

「もしもし、亜紀妃様。」

「ん？何でしょう、雄介さん。」

どうしても気になって、俺は亜紀妃に声をかけた。深刻な雰囲気ですりかいたら、亜紀妃はきつと、はぐらかす。だから、できるだけ明るく、問いかけてみる。

「亜紀妃って、昔に戻りたいな、とか、思う事ある？」

「え？何を唐突に。」

「雄介君の素朴な疑問！。」

微笑みかけると、亜紀妃はいぶかしげに首をかしげ、それから、うーん、とうなった。

「まあ、そりゃあ、あるよね。」

「あ、あるんだ。」

「みんな、思うんじゃない？辛い時は特に。」

「そっか。・・・亜紀妃はそれ、どうやって振り払ってる？」

「え？・・・なんだ、ゆんゆんそれで悩んでるの？」

あ、ばれた。

そうなってしまうと、何だか遠まわしに聞こうとしていたという事実が逆に恥ずかしくなって、照れ隠しに笑う。

亜紀妃は、少し呆れたようだったが、ふむ、と、顎に手を当て、何かを考えるそぶりを見せた。

「・・・私はね、あくまで、私は、だけど。」

そんなに念を押さなくても。

「・・・戻ってやり直したいことはあるよ。たくさん。けど、ホントに戻っちゃったら、嫌、かな。」

「嫌だ、って、どういうこと？」

戻りたい、そう、先に述べているではないか。なのに、嫌だ、なんて。

俺が何を考えているのか察したようで、亜紀妃は、そうじゃなくて、と、続ける。

「あのね、戻る、っていうのは、今、現在の記憶を保持してるつてのが、大前提なわけでしょう？目的はほら、失敗した事をやり直すことなわけだし。」

「まあ、そうだな。」

「じゃあ、やっぱり、戻りたいわけがないよ。」

いよいよ、亜紀妃が何を言いたいのか、わからなくなってきた。

もはや脳天にエクスクラメーションマークを浮かべることしかできない俺に、亜紀妃は呆れ顔で、告げる。

「だって・・・やり直しちゃったら、ゆんゆんに会えないかもしれないじゃん。」

・・・はい。・・・はい!?

想定範囲を大幅に超えるその理由に、俺は目をしばたかせた。

いや、考えてみたら確かに、時間を戻したら、過去をやり直す、っていうか、作り替えるわけだし、今と同じ日常が訪れるわけがないんだけど。

それから・・・いや、むしろ俺の混乱の大半はこっちが原因だけどっ。・・・す、すごく照れ臭いです、亜紀妃さん。・・・面と向かってそんなこと言われたら俺、どうしたら良いんですか。せめていつも通りこっち向いてよ。赤面して顔、伏せないでよ、ねえ。

そんな俺の思いを知ってか知らずか、亜紀妃はそつと顔を上げて、確かめるように繰り返し返した後、続けた。

「・・・時間、戻しちゃったら、さ、ゆんゆんに会えないかもしれない。・・・ううん、もし会えたとしても、こんなにゆんゆんの

こと、好きになれないかもしれない。・・・私は、そんなのヤダ。私、時間を巻き戻して、『ゆんゆんがいないかもしれない幸せな人生』を歩むくらいなら、『ちよつとくらい失敗が多くてもゆんゆんがいて、ゆんゆんが大好きでいられる人生』の方がいい。」「

・・・それは・・・嬉しいけど・・・。

言いそうになって口を押さえた。いかん。落ちつけ、俺。ここは諭す場面だ。亜紀妃は何か、変なフィルター越しに俺を見ているに違いない。

「亜紀妃。よく考えてもみるよ。やり直したら、もしかしたら俺なんかよりイケメンで、俺みたいなややこしい奴じゃない素直な奴が、亜紀妃を好きになるかもしれないんだぜ？」

「嫌。ゆんゆんがいい。」「

即答、ですか。

・・・俺、愛されてるなあ。ほんと、こんないい子の誘いを断り続けてるなんて、俺は何様なんだろうか。

そこまで考えて、ふと、我に返った。俺の悪い癖。・・・また、自分が嫌になる。

・・・でも。

「・・・ったく・・・絶対お前、人生損してる。」「

「いいのー。私はゆんゆんと一緒にいられたら、それでー。」「

でも、今日はいつもと違う。しがみついてくる亜紀妃に、思わず笑みがこぼれた。

そう、今はそこに、解決策が、ぼんやりとだけど、見えていた。だから、さっきの亜紀妃じゃないが、嫌だけど、嫌じゃない。つま

り、そんな気分。

「またもや思考に入り込んでしまった俺の目の前に右手をちらつかせた亜紀妃。反射的にその顔を見遣れば、ニヤリ、と不敵に笑う。「なんか、恥ずかしいこといっぱい言わされちゃったなあ、今日は。ゆんゆん、尋問上手っ。この、このっ。」

「お前が勝手に言った節が強いだろ・・・」

「えー。ゆんゆんが私に、好き、って言われたかったんでしょっ？」

「・・・まあ、否定しない。」

「きやは、やつぱりっ。・・・えっ!？」

「今、何て言った、ねえねえ、何て言った、と、俺の腕を掴んで振り回すその頭に軽くげんこつをくれてやり、俺達二人は夕暮れの通学路を歩く。」

「やり直したい過去がたくさんある、その事實は、なんら変わらな
いけれど。」

「ゆんゆんー!! ねえってば、もう一回言って!」

「いやですー!」

「お願い! もう一回・・・好き、って・・・言って?」

「だからそんな顔しても駄目・・・じゃねえ! 好きだとは一言も
言っ
てねえよ!」

「ちっ・・・気づかれたか・・・。」

「にやろっ。」

「ひゃあつ！婦女子虐待！や・・・くすぐったいってば！ゆんゆん！ひゃはははっ。」

今までを後悔するだけじゃない、今を大切に、する・・・できるかどうか、わからないけど。

それなら、亜紀妃と歩く人生も・・・悪くないかな、次に告白されたら、承諾してもいいかも・・・なんて。

冬の濁いた夕空は、先ほどの憂鬱な殻を脱ぎ捨て、明るく俺と、亜紀妃を照らす。

ああ、そうだ、今日の夕食、なんだろう。肉じゃがかな、目玉焼きかな、ああ、チキンライスもいいなあ。

「ゆんゆん？また、何か思い悩んでる・・・？」

「ごめん亜紀妃、俺今、夕飯想像するのに忙しい。」

「・・・はあ、心配して損した。こんな美女目の前にして、夕飯のこと考えてるの？」

「美女！？どこ！？」

「もおっ！ゆんゆんの馬鹿っ！」

「・・・ははっ。」

今までは聞く度に、死にたくなっていた亜紀妃の告白、待ってみるのも・・・面白い、か。

・・・明日からは少しだけ、今日より楽しくなりそうだな。

(後書き)

ご読了ありがとうございます！

今作は、私自身が疑問に思っていることへの一つの仮説として、執筆してみました。

主人公の心情を書き連ねる、という今作の特色上、文脈が前後したり、謎の倒置が生じていたり、と、全くもって読みやすいとは言えない作品となってしまうましたが、作者個人的に、本作はとも気に入っております。

上手い作品、とは程遠い文章ですが、何か感じて頂けたら幸いです。最後に。今一度。今作のご読了、ありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6980t/>

雄介君の素朴な疑問

2011年10月7日01時57分発行